

【 第 140 聖詠 第 4 調 】

しゆよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給

ま え 、 しゆよわれにききたまえ、しゆ主
主 我 聽 給 主

よなんぢによぶすみやかにわれにいたりたま
爾 呼 速 我 格 給

え 、 なんぢによぶときわがいのりのこえをい
爾 呼 時 我 禱 聲 納

れたま え、しゆよわれにききたま
給 主 我 聽 給

え、ねがわくはわがいのりはこうろの
願 我 禱 香 爐

かおりのごとく、なんぢがかんばせのまえに
香 如 爾 顔 前

のぼり、わがてをあぐるはくれのまつ
登 我 手 擧 暮 祭

りのごとくいれられん。しゆよわれにききた
如 納 主 我 聽 給

ま え。

誦經) しゆ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言

にかたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら
に傾きて、不法を行ふ人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の

あまみ な ぎじん われ ぼつ こ きょうじゆつ われ せ こ い
甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と

うるわ あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき
美しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の惡事に敵す。

かれら しゅちょう いわお あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き
彼等の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り

くだ わ ほね ちごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ
砕き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾

たの わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも
を恃む、我が靈を退くる母れ。我が爲に設けられし弼、不法者の網より我を護

たま ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え
り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第 1 4 1 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち
を其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと
に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ
る者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま
云えり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと
⑥主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

なんぢ まえ つつし ため
の爾の前に敬まん爲なり。

いま よ い とき いま すくい ひ ひとりじんあい しゅ なんぢ おお じんじ もつ
今は嘉く納るべき時、今は救の日なり、獨仁愛なる主よ、爾の多くの仁慈を以

わ たましい のぞ わ ふほう おもに おる たま
て吾が靈に臨みて、我が不法の重任を卸し給え。

われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの
⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

いま よ い とき いま すくい ひ ひとりじんあい しゅ なんぢ おお じんじ もつ
今は嘉く納るべき時、今は救の日なり、獨仁愛なる主よ、爾の多くの仁慈を以

わ たましい のぞ わ ふほう おもに おる たま
て吾が靈に臨みて、我が不法の重任を卸し給え。

わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ
④我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

じゆなんしゃ なんぢら じんあい しゆ くるしみ ねつせつ なら にくたい きず
受難者よ、爾等は仁愛なる主ハリストスの苦に熱切に效いて、肉體を傷創と

はなはだ くるしみ むすう いたみ わた つね め まえ らくえん しんせい たのしみ えいせい
甚しき苦と無数の疾痛とに付せり、常に目の前に樂園の神聖なる樂、永生

かて えいきゆう こうえい み これ え なんぢら かしょう もの ため いの たま
の糧、永久の光榮を觀たればなり、此を獲て爾等を歌頌する者の爲に祈り給え。

ねが しゆ たの けだしあわれみ しゆ おおい あがない かれ
③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

かれ そのことごと ふほう あがな
彼はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

い まつり れいち ぜんばん しゆ ちめいしゃ ぜんび ほふり かみ し またかみ し
活ける祭、靈智なる全燔、主の致命者、全備なる屠殺、神を知り又神に知らさ

るる こひつじ そのおり おおかみ い あた もの われら なんぢら とも しづか みづ ほとり
るる 羔、其牢に狼の入る能わざる者よ、我等も爾等と偕に靜なる水の畔に

ぼく いこ いの たま
牧せられて休わんことを祈り給え。

ばんみん しゆ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ
②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

しゆ なんぢ せいじんら し たつと けだしかれら つるぎ ひ さむさ やが おのれ
主よ、爾の聖人等の死は貴し、蓋彼等は劍と、火と、嚴寒とに壞られ、己の

ち なが たのみ なんぢ お ゆえ きゅうせいしゆ かれら しの のち そのこうろう
血を流して、恃頼を爾に負わせたり。故に救世主よ、彼等は忍びたる後に其功勞

むくい なんぢ おおい めぐみ う
の報として爾より大なる恵を受けたり。

けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゆ しんじつ なが せん
①蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

せい もの なんぢら きゅうせいしゆ まえ いさみ たも た われらざいにん ため いの
聖なる者よ、爾等は救世主の前に勇敢を有ちて、絶えず我等罪人の爲に祈り

て、諸罪の赦及び我等の靈の爲に大なる憐を求め給え。

【 生神女讚詞 第4調 】

The musical score is written on three staves in G major (one sharp) and 4/4 time. The lyrics are written below the notes. The first staff contains the first line of the hymn, the second staff the second line, and the third staff the third line. The score ends with a double bar line and repeat dots.

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
何 時 世 世

しょう しんぢょよ 、 なんぢ に よ り て か み の せんぞ と な
生 神 女 爾 因 神 先 祖 爲

りしよげんしゃダヴィドは なんぢにおおいなること
 預言者 爾 大 事

をなししもの に、なんぢのこ事をうたい
 爲 者 爾 事 歌

てよべり、によおうはなんぢのみぎにたて
 呼 女王 爾 右 立

りと。けだしちちなくなんぢよりあまんじて
 蓋 父 爾 甘

ひとのせいをとりしか みハスト ス、おおい
 人 性 取 神 みハスト ス、おおい

にしてゆたかなるあわれみをたもつしゅ は
 裕 憐 有 主

なんぢははをいのちのちゅうほしやとあらわせ
 爾 母 生 命 中 保者 現

り、これよくにくちたるおのれのか像
 是 愆 朽 己 のれのか像

たちをあらため、やまのなかにまよい
 改 山 中 迷

しひつじをえて、かたにおき、ちちのま前
 羊 獲 肩 置 父 前

えにたづさ え、おのれのむねにかな
 攜 己 の旨 協

わせ、これをてんぐんにあわせ て、せかい
 之 天軍 合 世界

をすくわんためな
救 爲 たり。

【 聖入 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにししてふくたるじょうせいなるてんのちちの
聖 福 常 生 天 父

せinar こうえいのおだやかなるひかりイイ
聖 光 榮 穩 光

ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく
我 等 日 入 至 暮

れのひかりをみて、かみちちとことせいしん
光 見 神 父 子 聖 神

をうと う。いのちをたもうかみのこ
歌 生 命 賜 神 子

よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ
爾 何 時 敬 虔 聲 歌

るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ
故 世 界 爾 崇

ほむ。

【 第一の提綱 ^{プロキメン} 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、^{えいち} 睿智、^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし。

誦經) ^{だいし} プロキメン、^{しらべ} 第四の ^{ねが} 調、願わくは ^{なんぢ} 爾の ^{じれん} 慈憐と ^{なんぢ} 爾の ^{しんじつ} 眞實とは常に ^{つね} 我を ^{われ} 護らん、^{まも}

ねがわくはなんぢのじれんとなんぢのしんじつと
願 爾 慈 憐 爾 真 實

は つねにわれをまもらん。
常 我 護

誦經) われせつ しゅ たの かれわれ かたぶ たま
我切に主を恃みしに、彼我に傾き給えり、

ねがわくはなんぢのじれんとなんぢのしんじつと
願 爾 慈 憐 爾 真 實

は つねにわれをまもらん。
常 我 護

誦經) ねが なんぢ じれん なんぢ しんじつ
願わくは爾の慈憐と爾の眞實とは、

つねにわれをまもらん。
常 我 護

司祭) えいち
睿智、

誦經) そうせいき よみ
創世記の讀、

司祭) つつし き
謹みて聽くべし、

【 創世記 5章30節～6章8節 】

誦經) としごひやく さんし う これ ひと はじ ちじょう
ノイは年五百にして三子を生めり、シム、ハム、イアフエト是なり。人始めて地上

はんしよく ぢよし かれら うま かみ しょし ひと ぢよし うるわ み その
に繁殖して、女子も彼等に生れたれば、神の諸子は人の女子の美しきを見て、其

およ える もの つま な しゅかみい わ しん なが こ ひとひと うち お
凡そ選べる者を妻と爲せり。主神曰えり、我が神は永く此の人人の中に居らざら

かれらにく ただかれら ひ ひやくにじゅうねん かのときち いじょうふ
ん、彼等肉なればなり、惟彼等の日は百二十年なるべし。當時地に偉丈夫あ

そのちかみ しょし ひと ぢよし い こう これら またいじょうふ
りき、其後神の諸子は人の女子に入りて子を生みしが、此等も亦偉丈夫にして、

いにしえ な ひと しゅかみ ひと あく ち み かくじんひび そのころ ただあ
古昔の名聲ある人なりき。主神は、人の惡の地に盈ち、各人日に其心に惟慝し

きことを^{はか}圖る^みを見たり、是に於て神は地上^{ここ}に人を造りしことを悔いて、其^{おい}心に憂^{かみ}いたり。

神曰えり、我が造りし人を我地の面^{われち}より滅^{おもて}し、人より家畜、昆蟲、天空^{ほろぼ}、

の鳥に及^{とり}ばん、我彼等を造りしことを悔ゆればなり。惟^{ただ}ノイは主神の前に恩^{しゆかみ}を獲^{まえ}たり。

【 第二の提綱 ^{プロキメン} 】

司祭) ^{つつし}謹^きみて聽くべし、

誦經) ^{だいろく}プロキメン、^{しらべ}第六の調、^{われい}我言えり、^{しゆ}主よ、^{われ}我を^{あわれ}憐み、^わ我が^{たましい}靈を^{いや}愈し^{たま}給え、

われい^{えり}、し^ゆよ、われを^あわれ^み、われ
我言^{えり}、主^よ、我を^あわれ^み、われ
が^{たましい}靈を^{いや}愈し^{たま}給え。
靈^{えり} 愈^し 給^え

誦經) ^{まづ}貧しき者^{もの}乏しき者^{もの}を^{かえり}顧みる人は^{ひと}福^{さいわい}なり、

われい^{えり}、し^ゆよ、われを^あわれ^み、われ
我言^{えり}、主^よ、我を^あわれ^み、われ
が^{たましい}靈を^{いや}愈し^{たま}給え。
靈^{えり} 愈^し 給^え

誦經) ^{われい}我言えり、^{しゆ}主よ、^{われ}我を^{あわれ}憐み、

わが^{たましい}靈を^{いや}愈し^{たま}給え。
我^{えり} 靈^し 愈^し 給^え

【 祝福 】

司祭) ^{えいち}睿智、^{つつし}肅^たみて立て、ハリストスの^{ひかり}光は衆人^{しゅうじん}を照らす。

誦經) ^{しんげん}箴言の讀、^{よみ}

司祭) ^{つつし} ^き 謹みて聽くべし、

【 箴言 6章20～7章1節 】

誦經) わ ^こ ^{なんぢ} ^{ちち} ^{ほう} ^{まも} ^{なんぢ} ^{はは} ^{いましめ} ^す ^{なか} ^{つね} ^{これ} ^{なんぢ}
我が子よ、爾の父の法を守れ、爾の母の誠を棄つる母れ、常に之を爾の
^{こころ} ^{むす} ^{これ} ^{なんぢ} ^{くび} ^お ^{これ} ^{なんぢ} ^ゆ ^{とき} ^{なんぢ} ^{みちび} ^い ^{とき}
心に結び、之を爾の項に佩びよ、是は爾の行く時に爾を導き、寐ぬる時に
^{なんぢ} ^{まも} ^さ ^{とき} ^{なんぢ} ^{かた} ^{けだし} ^{いましめ} ^{ともしび} ^{おきて} ^{ひかり} ^{おしえ}
爾を守り、寤むる時に爾と語らん。蓋誠は燈なり、法は光なり、教訓
^{せめ} ^{いのち} ^{みち} ^{なんぢ} ^あ ^{おんな} ^{いんぶ} ^{した} ^{へつらい} ^{まも} ^{いた} ^{なんぢ}
の謹は生命の途なり、爾を悪しき婦より、淫婦の舌の諂媚より守るを致す。爾
^{こころ} ^{うち} ^{かれ} ^{うるわしき} ^{した} ^{なか} ^{なんぢ} ^め ^よ ^{とら} ^{なか} ^{かれ} ^{そのまぶた}
は心の中に彼の美を戀う母れ、爾の目に因りて捕わるる母れ、彼は其瞼
^{もつ} ^{なんぢ} ^{いざな} ^{けだし} ^{いんぶ} ^{ため} ^{ひと} ^{わづか} ^{パン} ^{ひと} ^{かけ} ^{いた}
を以て爾を誘うべからず、蓋淫婦の爲に人は僅に餅の一角あるのみに至る、
^{かんぶ} ^{ひと} ^{たつと} ^{たましい} ^{とら} ^{ひと} ^ひ ^{ふところ} ^お ^{そのころ} ^も ^や ^{ひと}
姦婦は人の貴き靈を捕う。人火を懷に置きて、其衣を焚かれざらんや、人
^{やけずみ} ^ふ ^{そのあし} ^や ^{ひと} ^{そのとなり} ^{つま} ^つ ^{またか} ^{ごと} ^{これ}
藪炭を踏みて、其足を焚かれざらんや、人其鄰の妻に就くも亦是くの如し、之に
^{さわ} ^{もの} ^{つみ} ^{ぬす} ^{ものう} ^{そのたましい} ^あ ^{ため} ^{ぬす} ^{ひと} ^{これ} ^{ゆる}
捫る者は罪なしとせず。竊む者飢えて其靈を飽かせん爲に竊まば、人之を容さ
^も ^{とら} ^{そのしちばい} ^{つぐの} ^{そのいえ} ^{しょゆう} ^{ことごと} ^{いだ} ^{おんな} ^{かんいん}
ず、若し執えられば、其七倍を償い、其家の所有を悉く出さん。婦と姦淫
^{おこな} ^{もの} ^こ ^{むち} ^{これ} ^な ^{もの} ^{おのれ} ^{たましい} ^{ほろぼ} ^{かれきず} ^{はづかしめ}
を行ふ者は、是れ無知なり、之を爲す者は己の靈を滅す。彼傷と辱と
^う ^{そのはぢ} ^{つい} ^{そそ} ^{けだし} ^{ねたみ} ^{おつと} ^{いか} ^{むく} ^ひ ^{かれゆる}
を受けん、其耻は終に雪がれざらん、蓋妒忌は夫を怒らしむ、報ゆる日には彼寛
^{いか} ^{あがない} ^{かえり} ^{おお} ^{おくりもの} ^な ^{やわ} ^わ ^こ
さず、如何なる贖をも顧みず、多くの贈遺を爲すとも柔らがざらん。我が子よ、
^わ ^{ことば} ^{まも} ^わ ^{いましめ} ^{なんぢ} ^{こころ} ^{おさ} ^わ ^こ ^{しゅ} ^{とうと} ^{しか} ^{けん}
我が言を守れ、我が誠を爾の心に藏めよ。我が子よ、主を尊め、然らば堅
^ご ^{かれ} ^{ほか} ^た ^{もの} ^{おそ} ^{なか}
固にならん、彼の外に他の者を畏るる母れ。

※ 願わくは我が禱は、、、へ